

‘And’ だって訳して欲しい

— 論理・統語機能から豊かな表現機能へ —

有働 眞理子*

(平成5年9月30日受理)

“And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden party if they had ordered it. Windless, warm the sky with the cloud. ...”

0. はじめに

やたらと ‘and’ で文を始めてはいけないということは、英語の綴り方のイロハとして教わるものの一つであり、英語を母国語とする小学生も、第二言語として英語を学習する者も等しく英作文の時間に指導をうける。文法上の誤りとしてではなく、使用の頻度が文体の質の低下を招くというのが一般的な理由である。

この印象的認識の出所についてHalliday and Hasan (1976) では、‘and’ が参与して出来上がる関係は基本的に構文構成上のもの (structural) であって、結束性を示す意味上のもの (cohesive) ではないので、既に句読点を打たれて独立した文の連結に ‘and’ は不必要である、という母国語話者の直観に由来するものとしている。つまりこれは、‘and’ の機能は原則として文文法内に限定されるべしという立場である。この見方はある程度正しいと思われるが、このような ‘and’ 観に留まっていたら、作文の掟を破って実際に出現する幾多の文頭の ‘and’ の存在を説明するのに全く不十分である。また形式的にも、文を超えた単位と文との境界線の規定が不明瞭であり、ピリオドという記号の挿入のみで ‘and’ で始めてもよい文とそうでない文とを区分するという規定では、荒削り過ぎて記述的妥当性はおろか観察的妥当性さえ満たせない。しかも問題のタイプの ‘and’ は、本論文で掲げた出現例に代表されるように、作家や新聞記者など、ものを書くことを生業とするプロの文章にすら (にこそ、というべきか) 「おや？」というくらいに目立つのである。

冒頭の文は、短編小説家として名高いKatherine Mansfieldの*The Gaeden Party*という作品の、なんと冒頭の文である。この短編は、‘And’ によって文どころか、いきなり物語が始まっているのである。文を ‘and’ で開始することが容認性の低い有標の表現というのならば、Mansfieldのこの行為は一体何をそれこそ ‘物語る’ のであろうか。この論文においては、このような文頭の ‘and’ について、その分布の実態を観察しながら、語法・用法とおぼしきものを記述的に整理・分類することを目標とする。文法・認識・慣習などがどのように絡み合っているのか、このような表層の現象が生まれたのかについて考察する出発点としたい。

議論を始める前にこれまでの研究史の流れを概観したいところであるが、書きことばに

*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

おける文頭の ‘and’ を扱った先行研究は、残念ながらまとまったものとしてはほとんど存在しない。この等位接続詞についての学問的関心はつい最近まで主として、文レベルにおいて ‘and’ の論理的・意味論的機能を定義することに向けられてきた。論理学では古くはアリストテレスの頃より、命題や論理式を結合するための連言記号として、ほとんど数学的なまでに意味の多様性を捨象したものとして ‘and’ を捉えていたのに対し、言語学では意味論の中で、むしろ論理学の取りこぼした多様な意味を拾い上げて詳細に記述することに精力をそそいだが、恣意的な用法の列挙にとどまっており、いま一つ ‘and’ の総括的な全体像を伝えるものとしてまとまってはいない。一方、生成文法の枠内では、様々な範疇間の等位接続のパターンを系統立てて規則化した試みも中にはあるが、概ね ‘and’ そのものというよりは等位接続に絡んで省略や照応関係の解釈がどのようにして得られるのかといったことに関心が集中してきたようである。そこでもやはり、‘and’ の生態は静的・固定的なものとして捉えられている。

近年ようやく接続表現が動的なものとして、語用論の分野において再検討されるようになってきた (cf. Gazdar (1979), Blakemore (1987), Schiffrin (1987))。そこでは多様な解釈を生み出す原理を、定義の規定に頼るのではなく、発話理解のメカニズムに求めている点が新しい。つまり、‘and’ の働きは連結機能一点に絞り、接続された句や文の関係付けは、聞き手が Grice 流の会話の公準に則って推論を行ない、複数の可能な解釈の中から最適の一つを選んで決定する、という人間の能動的な行為を取り込んだ考え方である。本論は基本的にこの力動的な立場に立ち、‘and’ が語彙的に多義であるとする見方は取らない。そして、関係付けられるものが、文を遥かに超えて段落やセクションなどの文脈情報に拡大されたと思われる時も、文レベルと同様の言語知識の応用の結果様々な解釈が生まれるという前提に立つ。即ち、文頭の ‘and’ だけを文法から度外視し、周辺的存在として差別的に処理する文法観を排除し、あくまでも現象として存在する例まで取り込んで包括的に言葉の姿を記述・説明できるような文法を目指している。²

話し言葉と書き言葉は明確に区別する。なぜなら、Schourup and Waida (1988) の指摘するように、会話の中では饒舌を厭わなければ全文を ‘and’ で始めても容認性にさほど影響しないし、また、会話が途切れていないことを相手に知らせたり、相手の発言を促したりするために ‘and’ 一語で発話行為を成立させる³ 場合もあって、書きことばとはかなり様相を異にするからである。これはおそらく、会話というものが本質的に刹那的な在り方であり、何時途切れるのか予測出来ないのに対し、書かれたテキストは、視覚的にどこまで続いているのかが確認可能な存在であるので、そのことが ‘and’ の用法に影響を与えているということなのであろう。さらに、イントネーションなどの音声情報の有無や話し手・聞き手の関係といった干渉要素の違いも、この二つを区別する際に忘れてはならない。このようなことから、本論では書き言葉の出現例に限定して観察することとする。

手順及び方法については、無制限に膨大な書き言葉の資料に網羅的に目を通すことは不可能なので、この論文では、ジャーナリスティックな記事と文学作品の二つのタイプに資料的を絞った。前者に関しては Udo (1993) で、*Sunday Times Magazine* を資料として既に文頭の ‘and’ (これより And と略記) の用法をいくつか紹介したので重複するところもあるが、ここでもう一度若干の改訂も含めて簡単に整理・確認しておきたい。今回新しく分析の対象に加えた文学作品については、冒頭で引用した Mansfield の短編集から And が比較的頻発する作品を取り出し、その中に出てきた全ての And について観察した。ジャンルによる用法の違いが果たしてどの程度出てくるのであろうか。対応する日本語の

表現を探しながら、Andの働きを追ってみよう。

1. 論説的な文章の場合

Udo (1993) では、日曜版新聞に付く雑誌の記事からAndを拾いだし、使い方として目立ったものを三つのタイプに分類した。それら三つの機能とは、(ア) 文脈的に重要性のより高い次の話題について予告する、(イ) 直前に与えられた情報に付加価値を付けて強調する、(ウ) インパクトの強い資料を用いて証拠固めをする、の三点である。このリストは決して網羅的なものではなく、論説的な文章の型によって多様なタイプが発見され得ることは想像に難くないが、論理構成において効率良く情報の流れを調節する指標の典型例として、確認する必要があるものばかりである。ここでは、羅列されたこの三つの機能をもう少し系統立てて整理しておきたい。

文頭に出現するAndについて、特殊な語用論的用法として存在を認識し、インフォーマルに言及したvan Dijk (1981) は、会話の中に使われたものについてはあるが、その用法を概略的に述べているので、簡単にまとめておく。通常音声的休止や特別な音調曲線を伴って修辭的な色彩を帯び、聞き手の予想しなかったことをもったいぶって言いたい時や、付加的に‘moreover (しかも)’と同じ様な意味で用いる、というものである。この記述や上の(ア)、(イ)、(ウ)から判断すると、Andの中核的な機能を絞り込むとすれば少々乱暴ではあるが、〈相手の意表を突く新しい情報を、鳴り物入りで導入する〉ということになるであろう。要するに注意を引き付けるのである。したがって当然、あまり頻繁に用いると効果を失うので、ここぞという時にのみ使わなければならない。(ア)–(ウ)はさらに聞き手や読者が注意を向ける方向、即ち視点の向きによって大きく二つに分けられる。文脈の後方、即ちこれから新しく出てくる情報に向かうのが(ア)であり、文脈の前方、即ち既に出た文を参照・検討して情報整理するのが(イ)と(ウ)である。それでは各々のタイプについて具体的に見て行くことにしよう。

次のテキスト中のAndは後方照応の例である(下線筆者)。

“But why should winter darkness make certain individuals so miserable that they are unable to get on with their daily lives? Dr Stuart Checkley, head of the Institute of Psychiatry at the Maudsley Hospital, south London, says one possible explanation is that the part of the brain affected by depression is close to the part which controls body rhythms. And certain body rhythms are controlled by light.

During sleep, for instance, the hormone melatonin is produced. It peaks at around 3am and is suppressed by dawn light. In animals we know that melatonin controls seasonal behaviour such as breeding and hibernation. But its role in human behaviour is unknown.”

(*Sunday Times Magazine*, September 9, 1990)

この記事は、人間の健康状態がいかに天候や気象に影響されるものであるかについて、特に天候過敏症の原因を探って論じた文の一部である。大気中のイオンの状態や、季節風、寒暖等の諸条件について述べた後で、季節によって動物が冬眠するような肉体的状況に陥って悩む人々の話題になった部分である。この人々は冬になると何か月もうつ状態に苦しみ、

しかも大抵いつもより数時間もよけいに睡眠を取ったり、何キロも体重が増えたりして不
便きわまりないので、専門家たちがからくりを何とか突き止めようとしているのであるが、
色々な可能性の中で一番もっともらしいと思われる原因、つまりバイオリズムへの太陽光
線の影響に、話しの焦点を持って行きたい、まさにその時にAndが登場する。話題の転換
を知らせ、かつ新しい話題の情動的価値を予感させる働きをしているのである。したがっ
て、「さあ皆さん、いよいよ楽しみな種明かしですよ！」と声高に叫ぶわけにはいきまい
が、せめて、「注目すべきことに、バイオリズムはどうも太陽の光のコントロール下にあ
るようなのです」位には訳出した方がよいであろう。「そして」という接続詞で口火を切っ
ても、一体それが何と何をつないで「そして」なのか不明である。ここは単純に文が連続
しているところなどではない。そして、あくまでも予告であるから、(テレビ番組も映画
もそうであるが)本番、つまりその話題を論じる当の段落に登場する訳にはいかない。必
然的に、直前の段落の末尾に所在が落ち着くのである。但しこのパターンは、英語の等位接
続構造の統語規則を反映してとは思えず、むしろそれを外して表現が成立している点が
非常に興味深い。形式的には、接続詞andは、結合される範疇の最右方のものと構成素を
成すからである。本来なら、読者の注意を向けたい次の段落の初頭を飾る位置に来るのが
自然なはずなのである。しかし、Andが情報の塊という範疇から出奔したからこそ、予
告という機能なのである。言葉を操る人間が正当な規則違反をして新しい言語の慣習
(linguistic convention)を創ったということなのかもしれない。

話題の転換の予告ではない後方照応のAndも使用頻度が高いので、一例を挙げておく。
職業柄声量を豊かにしたい教師が、ロンドンにある特殊な訓練所に行ってみて、そこでの
奇抜な方法に度肝を抜かれる場面である。

“Angela’s workshop in London is equipped with bouncing balls, balance boards,
mini-trampolines and a climbing frame—all important aids in freeing the voice.
And the teachers discover, to their amazement, that loosening-up has a dramatic
effect. Lying across a large ball and bouncing gently up and down while reading
aloud from a book may seem undignified, yet it actually adds authority to the
voice because it is given spring. Standing talking with one’s face an inch from the
wall, arms raised away from the all-important armpits, makes the back resonate
and sound carry without shouting.”

(*Sunday Times Magazine*, March 8, 1992)

まるでサーカスのピエロのように、大きなボールに張り付いて足でトントンと床を蹴って
本を読むという方法を半信半疑で試してみたら、これが何と意外なほどの効果であったの
で本当に驚いた、というところであるが、教師たちがポカンと口を開けて圧倒されている
ような様子が、Andがマークしてくれているおかげで、実にリアルに伝わってくる。

一方、前方照応のAndには、先に述べたように二つの型がある。どちらも、Andで始ま
る文の情報をネタに、その直前に述べたことを決して軽視したり、誤解したり、忘れて
してはいけないと念押ししている、そのスタンスにおいて共通している。このタイプの
Andが出てきたら、直前に述べられた文を検索してその重要性を確認する必要がある。異
なる点は、ネタとしての情報源が理論的な根拠であるか、それとも具体例であるかとい
うことである。

次の例は、最近マスコミで話題を呼んだHelen Fisherという心理学者の著書“Anatomy of Love: The Natural History of Monogamy, Adultery and Divorce”に刺激されて、恋愛の在り方についての様々な考え方を紹介した雑誌記事の一部である。

“But phenylethylamine highs don't last forever, a fact that lends support to arguments that passionate romantic love is short-lived. As with any amphetamine, the body builds up a tolerance to PEA; thus it takes more and more of the substance to produce love's special kick. After two to three years, the body simply can't crank up the needed amount of PEA. And chewing on chocolate doesn't help, despite popular belief. The candy is high in PEA, but it fails to boost the body's supply.”

(*Time*, February 15, 1993)

レトリックを駆使し、内容的にも深遠なものを感じさせてなかなか難解な英文である。フェニールチアミン（PEA）という脳内物質が恋する気持ちをエスカレートさせる犯人なのであるが、残念ながらそれは二、三年で耐性が出来てしまい、効果が消滅する。（そしてもちろんそのことが倦怠期や別れの遠因となる、という。）いくらあがいてももう二度とときめきは取り戻せないということのアピールしたい箇所である。Andで始まる文中のチョコレート云々という表現は、分かりにくいのが、筆者即席の隠喩（メタファー）である。気持ちの停滞してしまった夫婦・恋人が、刺激剤あるいは起爆剤としてつい頼みになってしまう非日常的行為や何らかの代用品を指す。And文はここで、何とかしようとするささやかな二人の努力さえ、とりつくしまもなく否定する。そしてそれによって、フェニールチアミンの効用はもはや期待できないのだ、という前文のメッセージを強調するのである。「くれぐれも言うておくれが」あるいは「～しようってったって無駄である」といったような表現がニュアンスを伝えるであろう。

もう一つの前方照応型の例を簡単に確認しておきたい。笑いの医学的な効用が叫ばれてからというのも、積極的に医療の場へ出かけて治療の一助になるように、と奉仕活動をする自称道化役者が増えてきた。New Yorkのサーカスが既に専門の部隊を組織したのに加えて、英国でも遅ればせながらサーカスの道化役者が一人、活動をはじめた。しかも、事故に遭うという不運に見舞われながら、である。

“Since laughter is generally acknowledged to have a positive effect, clowns are being encouraged to come out of the circus and into the community. The Big Apple Circus in New York has a special “clown care unit” which does nothing but visit hospitals. And the British clown Salvo, a circus clown who was severely injured in a motorcycle accident, has devoted his life to making sick children laugh.”

(*Sunday Times Magazine*, March, 29, 1992)

この場合のAndは、よりインパクトの強い具体例を持ってくるサインとしての役割を果たしている。自分の国にもようやく行動に移す人間が出てきて良かった、という読者の共感と呼ぶ効果も感じられるであろう。あまり訳に技巧を凝らすとわざとらしくなる用法であるが、「我らがSalvoも当然のこと」などと嬉しそうな響きを表現すればよいのではないか。

2. 文学作品の中のAnd

言うまでもなく、文学は作者が読者をコミュニケーション相手の対象として表現する内容及び場である。その意味で、通常の会話と同列に置くことは躊躇すべきであるにしても、文学もやはり一種の発話行為とみなすことができよう。発話行為の最も基本的且典型的な機能は、聞き手に、発話された文の解釈の結果ある種の心的変化を起こさせるところにあるが、文学の場合、その心的変化が基本的に‘楽しむ’という娯楽性によって特徴づけられる。⁵ 感動や笑いだけでなく、恐れ、怒り、悲しみなどあらゆる人間の感情を刺激・喚起するために、作者はありとあらゆる表現の工夫を怠らない。読者をより効果的に楽しませよう、用意周到に物語の伏線を張り巡らし、突然場面や状況を転換するのはもちろんのこと、時間の流れを自由に調節したり、予感させたり、余韻を残したり、縦横無尽に作品を織り上げてゆく。そのような物語の展開に、Andはどのように貢献しているのだろうか。Mansfieldの短編小説を読み、話しの動きを辿りながら検証してゆくことにする。但し、登場人物の台詞の中及び一人称での語り文の中のAndは原則として対象から外す。理由は序章において述べた通り、話し言葉と区別するためである。

前章で見た論理的文章の中のAnd以上に、物語中のAndの役割はヴァリエティに富んでいるようである。自分の主張を読者に納得させるために有効な論理構成のパタンの数に比べて、物語のパタンは無制限と言ってよいほど多く、そのことがAndのレパートリーの増加につながっているのであろう。例として、*Her First Ball*（邦題「はじめての舞踏会」）という短編を取り上げる。

この話は、始めて舞踏会を経験した娘のデリケートな心の動きを描写したものである。主人公Leilaは、舞踏会がどんなものかわからないので最初は不安で家に帰りたくなったり、そのくせ周囲の様子から華やきを感じ取って期待にむねを膨らませたりして揺れているのであるが、人の動きや雰囲気を押されて踊りの輪の中に引きずり込まれてゆく。そこでLeilaは、あたりさわりのないことしか言えないが踊りは抜群にうまい若者に混じって、風采の上がない初老の男に踊りの手を取られてしまう。男は、Leilaが舞踏会が初めてであることを見破った上で、その場にいる年配の人々にLeilaの注意を促しながら、人生の黄昏の侘しさ、虚しさ、そして苦さについて語り、一瞬の間にLeilaを失望と混乱と疲労に陥れる。ところが、次のパートナーと踊り始めた途端、Leilaは何事も無かったかの如く優雅に踊りに興じるのである。

最初のAndは、入場を前にして娘たちが急いで身支度を整える場面の段落に使われる。

“Leila put two fingers on Laura’s pink velvet cloak, and they were somehow lifted past the big golden lantern, carried along the passage, and pushed into the little room marked ‘Ladies’ . Here the crowd was so great there was hardly space to take off their things; the noise was deafening. Two benches on either side were stacked high with wraps. Two old women in white aprons ran up and down tossing fresh armfuls. And everybody was pressing forward trying to get at the little dressing-table and mirror at the far end. ”

会場の建物に到着するが早いか娘たちは流れ作業的に化粧部屋に連れて行かれる。髪や顔を整える具体的な仕草を描く前に、画面をズームアップしながら、その場の忙しい空気

を捉えるようにAndが場面設定を取りまとめている。これは単に「そして」のような穏やかな順接機能ではなく、黄色い声のざわめきまで聞こえてきそうな切迫した状況のサインと見るべきなのである。「まさに」とか「いよいよ」などの方が正確にニュアンスを伝えるであろう。

次に娘たちの化粧する姿が鏡に映るかのような描写の中で第二のAndが現れる。

“Dark girls, fair girls were patting their hair, tying ribbons again, tucking handkerchiefs down the fronts of their bodices, smoothing marble-white gloves. And because they were all laughing it seemed to Leila that they were all lovely.

‘Aren’t there any invisible hairpins?’ cried a voice. ‘How most extraordinary! I can’t see a single invisible hairpin.’

‘Powder my back, there’s a darling,’ cried someone else.

‘But I must have a needle and cotton. I’ve torn simply miles and miles of the frill,’ wailed a third, ”

このAndは、部屋の状況の描写から人物へと視点を移し、娘たち皆が輝いて見えることにハイライトをあてる働きをすると同時に、Leilaの観察の眼を想起させる機能も果している。ここでも「笑顔でよけいに娘たちが美しく見えた」のような訳出上の工夫が必要であり、単純な順接の接続詞の補充では不足である。

第三のAndは、いよいよLeilaがホールに入り、その豪華な雰囲気によって圧倒されて瞬時に舞い上がってしまうところに使われる。

“She quite forgot to be shy; she forgot how in the middle of dressing she had sat down on the bed with one shoe off and one shoe on and begged her mother to ring up her cousins and say she couldn’t go after all. And the rush of longing she had had to be sitting on the veranda of their forsaken up-country home, listening to the baby owls crying ‘More Pork’ in the moonlight, was changed to a rush of joy so sweet that it was hard to bear alone. She clutched her fan, and, gazing at the gleaming, golden floor, the azaleas, the lanterns, the stage at one end with its red carpet and gilt chairs and the band in a corner, she thought breathlessly, ‘How heavenly; how simply heavenly!’ ”

気後れから歓びへと気持ちが突然変化する瞬間をAndが捉えているのがわかるであろう。もしもここでAndが無かったとしたら平板な展開に終わるであろう。「何ということか、あつと言う間に」、「今までの不安をよそに突然」、などのように急変化であることを自由に表現すればよろしい。

第四のAndは、いよいよ問題の年配の醜男が登場する場面に出てくる。

“Then quite an old man—fat, with a big bald patch on his head—took her programme and murmured, ‘Let me see, let me see!’ And he was a long time comparing his programme, which looked black with names, with hers. It seemed to give him so much trouble that Leila was ashamed. ‘Oh, please don’t bother,’ she

said eagerly. But instead of replying the fat man wrote something, glanced at her again. 'Do I remember this bright little face?' he said softly. 'Is it known to me of yore?' At that moment the band began playing; the fat man disappeared."

状況を機械的に描写するのであればAndがここに出現する必要は全くない。しかし、ここは、この男がちょっと顔を出してその場はすぐに離れるが、後にLeilaが彼に困らせられる成り行きの伏線となる部分であるので、読者にこの登場人物を印象づける重要な役割をAndが担っていると言える。しかも、Leilaが少しうんざりするくらいに踊りの順番表を眺める姿に、読者はこの男の無粋な行為を予感するであろう。ここでもやはり、「そして」の単純挿入がいかにも物足りない翻訳を作ってしまうかがわかる。

第五のケースは少々装飾的・演出的な機能である。若い踊りのパートナーとの会話でLeilaが不器用至極な対応をした時に、相手が息をのんで一瞬とまどう、その緊張感をAndが表現する。

"Someone's hand pressed her waist, and she floated away like a flower that is tossed into a pool.

'Quite a good floor, isn't it?' drawled a faint voice close to her ear.

'I think it's most beautifully slippery,' said Leila.

'Pardon!' The faint voice sounded surprised. Leila said it again. And there was a tiny pause before the voice echoed, 'Oh, quite!' and she was swung round again."

社交ダンスを踊りながら床のことを聞かれたらどう答えるのが礼儀なのかは定かではないが、Leilaが期待された答えを外したのは明らかである。一瞬の沈黙の重さをAndが表現している。日本語なら「ややあって」、或いは実際はちょっとどころではない「ちょっとした沈黙」などと表現するところであろうか。ちなみに、「と」、という繊細な接続詞を用いて工夫した翻訳もあった。⁶（日本語の「と」も、Andと同じように句・文レベルを超えて語用論的用法へと発展したケースなのであろうか。）

第六番目は、六個のAndが矢継早に連発される例なので、かなり長いが、まとめて提示することにする。

" 'Floor's not bad,' said the new voice. Did one always begin with the floor? And then, 'Were you at the Neaves' on Tuesday?' And again Leila explained. Perhaps it was a little strange that her partners were not more interested. For it was thrilling. Har first ball? She was only at the beginning of everything. It seemed to her that she had never known what the night was like before. Up till now it had been dark, silvent, beautiful very often—oh yes—but mournful somehow. Solemn. And now it would nerver be like that again—it had opened dazzling bright.

'Care for an ice?' said her partner. And they went through the swing doors, down the passage, to the supper-room. Her cheeks burned, she was fearfully thirsty. How sweet the ices looked on little glass plates and how cold the frosted

spoon was, iced too! And when they came back to the hall there was the fat man waiting for her by the door. It gave her quite a shock again to see how old he was; he ought to have been on the stage with the fathers and mothers. And when Leila compared him with her other partners he looked shabby. His waistcoat was creased, there was a button off his glove, his coat looked as if it was dusty with French chalk.”

答えをとちるほど緊張していたのが、初めてであるということをもしろ楽しむ余裕が少し出来たところであり、例の年配の男と相手を組み直前の場面である。解り易いようにAnd間の情報の流れを追ってみると、次のようになるであろうか。[挨拶のような陳腐な質問を受ける－【And】再びお決まりの質問を受ける－【And】舞踏会に慣れてしまった人々の様子に戸惑いながらも、今まで知らなかった世界の華やかさを認識する－【And】社交会デビューの悦びを感じる－【And】踊りの間の休息さえ楽しむ－【And】年配の男とはち合わせし、改めて年齢の差を痛感する－【And】男のみすぼらしさ・かっこ悪さに愕然とする] もっと端折ってLeilaの心情を辿れば、[戸惑い－戸惑い－感慨－感激－心地よさ－驚愕－失望] となっている。短い間によくもこれだけ変化するものである。若さの特権であろうか。Andは、このめまぐるしい心境の変化の間を縫って、まるでスウィングしたりターンしたりしてめりはりの効いた踊りの如く、リズムをつけながら物語の展開をスピードアップする。このあたりは、独立した語や句で訳出するのは困難であり、躍動感を全体的に漂わせる表現を心がけるしかあるまい。このように、集中してAndを出現させることによってスピード感を演出する、⁷ というパターンはMansfieldの他の作品にもしばしば見られるものである。⁸

さて、物語は佳境に入る。さえない容貌に似合わず男は踊りのリードも上手いし、Leilaを戸惑わせる社交辞令も言わない。しかし逆に率直過ぎて、人生の苦さを必要以上に語ることによって、抵抗力のついていないLeilaの心の柔らかい部分を突いてしまう。先程の感激もどこへやら、もう踊る気力も失せ、いたいけな少女のように心の中で弱々しく泣くLeilaであった。最後のAndは作品最後の文章の頭に現われ、Leilaが世慣れた淑女に突如変身する物語のクライマックスで、読者の積み重ねてきたイメージを瞬時に覆えず寸前の警鐘となっている。

“But presently a soft, melting, ravishing tune began, and young man with curly hair bowed before her. She would have to dance, out of politeness, until she could find Meg. Very stiffly she walked into the middle; very haughtily she put her hand on his sleeve. But in one minute, in one turn, her feet glided, glided. The lights, the azaleasm, the dresses, the pink faces, the velvet chairs, all became one beautiful flying wheel. And when her next partner bumped her into the fat man and he said, ‘Pardon,’ she smiled at him more radiantly than ever. She didn’t even recognise him again.”

人生も人の心も認識も何と移ろい易くはかない存在であるか、読者のLeilaに対する共感と同情の念は音を立てて崩れ去る。Andがここになればそのような物語の含意は生まれず、単に肩すかしをくわせる事実が続くのみである。この決定的に重要なAndもまた対応

表現を定め難い意味機能である。音声であれば、メロディや速度、声の質などを色々に変化させて予想外の事実を効果的に宣告するところであるが、書き言葉においてはそうはいかない。「何と驚いたことに」、あるいは「これまでの不安定な心の揺れがまるで嘘のように」といった句を挿入してもかえって大げさである。ここは、この男の顔さえ忘れてしまっていたという記述の残す余韻で代用するしかないであろう。

以上、一つの短編小説に添って、Andが効果的に話のアクセントをつけてゆく様子を観察した。Mansfieldの作品は物語性が希薄でプロットらしいプロットがないので、典型的な小説とは言い難いという評価もあるらしいが、⁹ 一幅の絵を見るような印象的な短編小説だからこそAndの機能が随所で生きている感が強い。そこで、散文の中でも種類によって異なった働きがあるという可能性をふまえ、一人の作家の短編小説の枠内という制約を設けた上で、物語中のAndの機能について再確認し、まとめておきたい。観察された機能を簡条書的に列挙すると次の通りである。

- (a) 物語の伏線を引く・展開を暗示する
- (b) 場面・状況を転換して新しい背景を設定する
- (c) カメラアングルとなる（ズームアップ・ズームイン・視点の移動・コントラスト）
- (d) 心理変化の道標となる（登場人物の心の変化を知らせる・読者の反応を導く）
- (e) 時間の流れを調節する（発進・加速・減速・停止）
- (f) 予感・余韻を醸し出す

実際に登場するAndの機能は一つとは限らず、組み合わせ可能な機能を複数同時に持つこともある。例えば、Bliss（邦題「幸福」）という作品の中にこんな例がある。

“While he looked it up she turned her head towards the ball. And she saw…Harry with Miss Fulton’s coat in his arms and Miss Fulton with her back turned to him and her head bent. He tossed the coat away, put his hands on her shoulders and turned her violently to him. His lips said: ‘I adore you,’ and Miss Fulton laid her moonbeam fingers on his cheeks and smiled her sleepy smile. Harry’s nostrils quivered; his lips curled back in a hideous grin while he whispered: ‘Tomorrow,’ and with her eyelids Miss Fulton said: ‘Yes.’”

これは、夢見る乙女そのものの主人公が、誰かと部屋で雑用を処理している時に、図らずも、玄関のところで夫Harryと自分の友達であるMiss Fultonが抜き差しならぬ雰囲気では逢引の約束を交している光景を目撃してしまう場面である。しかも、HarryとMiss Fultonは彼女が知る限りお互いに敬遠し合っている仲であるはずであったのに。一行目のAndは、主人公の視点が移動し—(c)、その結果見てはならないものを見てしまって衝撃を受け—(d)、ショックのあまり頭の中で時間が止まってしまう—(e)、といったように三つの機能を同時に果たしていることが解る。もちろんこのような、読者の心もドキッとさせる用法が、物語の結末を形成することになるということも自明であろう。

論理的な性格の文章と比較して最も際立って異なる点は、物語のAndが前方照応的な用法がなく、後方照応的な用法しか持たない点である。これはある意味では当然とも言える。というのも、前方照応的な用法では、主張内容を強調・正当化するための根拠を示すこと

が基本的な仕事であるが、物語においてはそのような機能は全く必要がないからである。根拠を示すのは、理論的後ろ楯をもって相手に何かを説得したい場合に限るのであって、物語を読む読者の視線は、時間的な意味ではなく筋書的な意味で、常に次に出る情報にか向いていない。(推理小説の場合は事情が異なるかもしれないが。) 物語という発話行為が読者に何らの義務も負わせる性質のものではないことは、Dijk (1981) が “A literary text in general does not put reader under obligation, does not necessarily direct the reader to a form of (social) action as orders, requests or advices do.” (p.250) と述べている通りである。とはいえ、Andによって情報の流れにアクセントをつけ、文脈の構成を整えている点では両者とも共通しており、それがAndの最も貢献度の高い役割と言ってもよいであろう。

それではここで、上にのべた物語中のAndの働きをふまえて、この論文の冒頭に載せた *The Gardem Party* (邦題「園遊会」) の一節についての解釈をおさえておきたい。便宜上もう一度その部分を示す。

“And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden party if they had ordered it. Windless, warm, the sky without a cloud. ...”

この物語もまた他の作品と同様、まだ世の中の垢に毒されていない感受性の豊かな少女を主人公とする。ある時この少女の家で園遊会を催すことになるのであるが、そのための準備に忙しい優雅で華やかな世界のすぐ傍で、一つの不幸が起こる。少女はこのことを知り、純粋な心から園遊会を開くべきではないと感じて悩む。しかし、貧しい人々への下手な同情から別の世界にいる自分たちの予定をキャンセルすることはかえって間違っている、と母親に諭される。少女の心には迷いが生じるが、美しい帽子をかぶった途端、その迷いを吹っ切ろうとし、やがて忘れる。園遊会の後、余った食べ物を不幸のあった家に届けようと急に思いついて、少女は出かける。みすばらしい家や人々。少女はすぐに来たことを後悔する。怖くて逃げ出したい気持ちに駆られたちょうどその時、促されて、死んだ男の顔を間近に見てしまう。と、現実世界を超越し、安らかな眠りの世界に沈む死に顔に、少女は崇高な美を感じ、えも言われぬ感激にうちふるえながら帰途に着くのである。

抜粋した冒頭の文は、園遊会当日の朝の様子を描いている。戸外のパーティであるから、天気は当然真っ先に気になることである。したがって、素直に「いよいよ、その日は、申し分のない天気になった。」(崎山訳、1969)、あるいは「それで結局天気は申し分なかった。」(黒沢訳、1961) と始めてもよいように一見思われる。しかしながら、既に観察したように、Andは決して伊達に現われるものではないのである。要注意・警戒すべし、のしるしなのである。おまけに、ここには after all という、理由を表わす接続詞が付加されているではないか。(例えば、Of course I'll lend you the money. After ALL, what are friends for? という発話は「もちろんお金は貸してあげるよ。だってそうだろう、君は僕の親友なんだから」というように訳される。⁹⁾ そして、そのような言語上の証拠もさることながら、少女が、園遊会を開催することに対して、身近で起こった不幸を理由に罪悪感を抱いているという状況がある。もちろん、問題の文は少女が直接言ったものではない。しかし、少女の気持ちを物語がその前から既に予感し、反映していると考えてもおかしくはない。このことを併せて考えると、先の二つの翻訳文は、僭越ながら、誤訳であ

るといわざるをえない。拙いが、「そもそも、またとない天気だったからしかたがなかった（園遊会を催さないわけにはいかなかった）のだ。」と言いつがましく述べるか、あるいは「またとない素晴らしい天気であったのが、全ての始まりであった。」というように予感めいた序とするか、いずれにしても、読者が「一体どういうことなのだろう」という興味に突き動かされて読み進むきっかけとなるような翻訳でなければならない。ただでさえ有標のパターンである文頭のAndが、小説の冒頭でかなり意識的に使われた破格の用法なのであるから、¹⁾ それに見合った表現を対応させてしかるべきであろう。

3. 結び—理論的位置付け

文をAndで始めることには文体上の問題があると一般に思われているが、この論文でこれまでに確認したように、むしろ特殊・高級なテクニックとして様々なジャンルの文章に活用されているのが実情である。今回検証したのは、雑誌記事と短編小説という、性格付けの全く異なる二種類のテキストであった。両者は、読者の注意を引くという共通点で結ばれるが、同時に違った機能も持っている。前者は、And文が、その前後で述べられた情報を強調するための、どちらかという補助手段的な存在であるのに対し、物語文中のAndは、それ自体が最も注目すべき情報を担っているハイライトを浴びるのである。つまり、テキストの種類がAndの機能の在り方を決定していると言ってもよい。この論文では、論理性と物語性の違いがAndの機能の違いに反映していることを確認した。将来様々なジャンルの文章を資料として、より多くのヴァリエティに富んだ型を発見してゆくことが、文体や文法について、興味深い知見及び示唆を与えてくれるものと期待できる。

言語教育の分野についても、Andの問題の検討から色々な示唆が得られると思われる。一章と二章で、文脈によってAndが実に様々な意味機能を持つことを見たが、文脈を持って初めて表現の解釈が決定されることはもっと強調されるべきであるし、Andがあったら解釈は要注意、というような記憶し易い秘訣があれば英語を読む時に非常に役に立つはずである。このことを知らないほとんどの学生が、反射的に「そして」という日本語の表現しか思いつかないので、誤訳するばかりでなく、文脈の流れを完全に取違えてしまう。また、Andの色々な意味を辞書の中でどのように記述したらよいか、という多義性の取扱いも大切な問題であろう。

最後に、理論上の課題として、これほどまでに表現豊かな用法が、どのようにして生じたのかを説明すること、即ち文法の原理と実際の言語現象の関係を捉えることがまず肝要である。つまり、これ以上分解できないAndの中核的意味（真理条件的&）にどのような干渉要素が作用すると語用論的な機能を確立するのか、その成立条件を規定することである。その場合、意味部門と語用部門の間に明確に境界線が引かれるような関係か、それとも、境界線はなく、より包括的な意味の世界でのみ説明され得ることであるのか、文法観に関わることでもあるので、その点を見極めることは非常に重要な課題である。

注

1. この例は筧壽雄教授より御指摘いただいたものである。
2. この文法観はFillmore (1979, 1983) に負うところが大きい。
3. Ayako: "I found a beautiful dress in Motomachi yesterday. It's a bargain"
Mariko: "And?"

4. van Dijk (1981), p.108参照。
5. van Dijk (1981), pp.245-263参照。
6. 伊沢龍雄訳、岩波文庫、p.317。
7. 論文の手引書 (Messenger and Bruyn, 1986, p.130) に次のようなコメントが載せられている。"And, especially in a narrative, a succession of opening And's can impart a feeling of rapid pace, even a sense of breathless excitement. Used too often, they can become tedious, but used carefully and when they feel natural, they can be effective."
8. *Carnation* という作品に次のような例がある。主人公はある暑苦しい日にフランス語の時間中、窓の下の中庭でポンプで水を汲んで作業をする男に気がつく。授業の時間の流れがいつの間にかポンプの音のリズムと重なってだんだん速く、騒々しくなってゆくところである。
"Now she could hear a man clatter over the cobbles and the jing-jang of the pails he carried. And now Hoo-ho-her! Hoo-hor-her! as he worked the pump and a great gush of water followed. Now he was flinging the water over something, over the wheels of a carriage perhaps. And she saw the wheel, propped up, clear of the ground, spinning round, flashing scarlet and black, with great drops glancing off it. And all the while he worked the man kept up a high, bold whistling that skimmed over the noise of the water as a bird skims over the sea."
9. 伊沢訳、1969、p.401。
10. Schourup and Waida (1988)、pp.19 &29参照。
11. *Honeymoon* という作品にもこのテクニックが採用されている。

参考文献

- Blakemore, Diane (1987), *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell.
- van Dijk, T.A. (1981), *Studies in the Pragmatics of Discourse*, Mouton.
- Fillmore, C.J. (1979), "Innocence: A second idealization for linguistics", *BLS* 5, pp.63-76
- Fillmore, C.J. (1983), "Syntactic intrusions and the notion of grammatical construction", in *BLS* 11, pp.73-86.
- Gazdar, G. (1979), *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*, Academic press.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1976), *Cohesion in English*, Longman.
- 黒沢茂訳 (1961)、『マンスフィールド全集』全3巻、垂水書房。
- Mansfield, K. (1983), *The Garden Party and Other Stories*, Clair Tomalin, reprinted in 1991 by David Campbell.
- Messenger, W.E. and J. de Bruyn (1986), *The Canadian Writer's Handbook*, Prentice Hall.
- Schiffrin, D. (1987), *Discourse Markers*, Cambridge University Press.
- 崎山正毅・伊沢龍雄訳 (1969)、マンスフィールド短編集『幸福・園遊会』、岩波書店。
- Schourp, L. and T. Waida (1988), *English Connectives*, Kuroshio Press.
- 瀬戸賢一 (1986)、『レトリックの宇宙』、海鳴社。
- Udo, M. (1993), "A Note on the Pragmatic Force of Sentence-initial 'And' - Its Contribution to the Communication Process -" 兵庫教育大学言語表現学会『言語表現研究』第9号 pp.1-9.